大妻女子大学博物館　特別展

日本文学関係貴重書展示

メディアの変遷　―近世近代を通底する―　解説資料

会期：二〇二一年十月十二日(火)～十一月十二日(金)

特別展の開催にあたって

現在、日本文学史を記述する際に、明治維新によって「古典文学」と「近代文学」とに二分するのが一般的である。中学高校でも慶応四（一八六八）年以前を「古典」、明治元（一八六八）年以降を「現代」として教え続けている。その上、大学入試では「古典」は「歴史的仮名遣い」に、「現代文」は「現代仮名遣い」に統一することが要求されている。しかしこれは、実体的にはあり得ない。仮名遣いを含めて表記（書記）は古くから揺れ続けているもので、「言文一致」と言いつつも「～は」「～へ」だけが発音と異なる表記として定着してしまったことを見ても、「歴史的／現代」という仮名遣いの区別は粗雑なものであるといわざるを得ない。

そもそも、政治経済体制が徳川幕藩制から天皇（国家神道）制へと変遷したことをもって、人々の読書生活が一変したとは考えられない。江戸時代から続いてきた書物の様式のみならず、仮名遣いや書記法などを含めて多くの文学にまつわる慣習は連綿として継承され、少なくとも明治二十年代までは、その伝統的な様式が活きていたものと考えられるのである。

折しも、この明治初期は印刷メディアが整版（板本）から活版（活字本）へと移行してゆく時代でもあり、書物の製作と流通の変化によって、書物の享受法や人々の読書生活も緩やかに変化していったのである。

そこで、今回は十九世紀（近世末期から明治初期）という明治維新を跨いだ枠組みに拠り、本学に所蔵されている資料を中心に、明治期まで継続した板本時代の様相と、明治期に様々な試行錯誤を通じて出版された活字活版本の様相の具体的な変遷を追える展示を企画した。

大妻女子大学　文学部　教授　髙木　元
教授　木戸雄一

第一部　南総里見八犬伝の諸相

稗史小説『南総里見八犬伝』（以下『八犬伝』）は、十九世紀日本文学を代表する一大長編小説で、九十八巻百六冊におよび、肇輯（初輯）が発行された文化十一（一八一四）年から完結まで二十八年間を要し、天保十三（一八四二）年に完結した。岩波文庫『南総里見八犬伝』では、新版旧版とも十冊に及ぶ長編であり、おそらく全巻読破した人は多くはないものと思われる。

残念ながら、作者である曲亭馬琴（滝沢＋馬琴は誤り）は「読まれざる文豪」と称されて久しいが、多くの人々は原文を読むことなく〈仁義礼智忠信孝悌〉の文字が浮かぶ不思議な玉を持った「里見八犬士」と呼ばれる少年達が活躍する冒険小説であることを知っている。それは、原作の完結以前から、原文テキスト以外のメディアが出され続けていて、広く知られていたからであった。

たとえば、江戸時代を代表する大衆絵入小説であった草双紙（合巻）の『仮名読八犬伝』（三十一編、嘉永元（一八四八）年から明治元（一八六八）年）や『雪梅芳譚犬の草紙』（六十編、嘉永元（一八四八）年から明治十五（一八八二）年）がある。この二作は別の板元から競作として出板されたものである。また、鈍亭（仮名垣）魯文編の抄録本『英名八犬士』があり、後に改題改竄本『里見八犬伝』が出されていた。さらに、常磐津、狂歌本、講談種、春本にまで扱われ、江戸時代から現在に到るまで幾度となく芝居（歌舞伎・浄瑠璃・商業演劇）などでも上演され、寄席で話芸として講談で演じられたり、その速記本を含めた講談本にもなった。その後も明治大正昭和を経て現代に到るまで、児童書や映画・アニメ、コミックスやライトノベルとしても改作され続け、改作も少なくない。これらのメディアミックスぶりは、他の日本古典文学では見られない特異な現象なのである。

そこで、今回の展示では、初板初摺に近い板木を用いて摺られた板本（原本）から、その後摺本への変化や、明治時代に入ってからも摺られ続けた板本の様相を、原本に即して理解出来るように展示してみた。また明治十五（一八八二）年から出された和装の変体仮名の活字が用いられている活版本も御覧頂きたい。これには一部の口絵挿絵が模刻して入れられている。さらに、多色摺の錦絵風摺付表紙を備えた草双紙の美しさにも、ぜひともご注目頂きたい。

（第一部解説　髙木　元）

一　南総里見八犬伝

曲亭馬琴作　柳川重信・溪齋英泉画
全九輯　九十七冊、半紙本
文化十（一八一三）年～
天保十三（一八四二）年刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

読本は大変に高価な本であったので、一般的には貸本屋を通じて読まれていた。しかし、展示資料には貸本屋印が見られないので、裕福な愛書家が購入した本が、現在まで大切に保管されていたものであると思われる。一部改装されているものの、大変に保存状態の良い美本である。

展示資料は一冊（第五輯巻三）だけが欠本であるが、本来上下二分冊されていた巻々（第六輯巻五、第九輯巻十二、巻四十二、巻五十三）を合綴。結果として、本来の綴じ方であれば全百六冊中一冊欠の百五冊であるが、現状では九十七冊となっている。

基本的に、肇輯から七輯までは文溪堂（丁子屋平兵衛）に拠って天保二（一八三一）年以降に出された改修後印本。なかでも比較的早い段階で摺られたものであると思われるが、肇輯と二輯の表紙が早印本とは別の意匠で作り替えられている。八輯以下は一部を除いて文溪堂板の初板早印本である。

二　南総里見八犬伝

曲亭馬琴作　柳川重信・溪齋英泉画
第二・五・六・七輯
各五・五・六・七冊　半紙本
天保十三（一八四二）年以降の後印本
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

この資料は、天保期をさらに下った江戸末期に出された文溪堂板の改修後印本である。第五輯の表紙は早印本の模刻がされているが、第二・六・七輯の表紙が新たに作り直されている。第二輯は口絵挿絵の彩色板を新たに改刻し、濃淡二色の薄墨板や艶墨板を誂えて、やや厚手の楮紙を用いて摺り、見栄えを良く改修したものである。ただし、資料一の欠本（第五輯巻三）を備えているが、見開きの挿絵「闘牛図」（七輯巻五）は削除されている。

三　南総里見八犬伝

曲亭馬琴作　柳川重信・溪齋英泉画
後印本　九輯五十三巻百六冊　半紙本
名山閣（和泉屋吉兵衛）板　明治初期刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

見返しに「東京名山閣版」とある。基本的に八輯以下の板元である文溪堂が出板した後印本（四五輯を各五巻五冊に改編）を踏まえた構成である。初版初印本の第九輯下帙下編之上〈巻三十六～四十〉の表紙の意匠を粗雑に摸したもの。上部は紺色地のボカシ下げ白抜き、下部は鸚鵡緑地のボカシ挙げに子犬を白抜き、乾坤一草亭印は紅色摺。

刊記は「大阪　河内屋喜兵衛／同　伊丹屋善兵衛／同　敦賀屋九兵衛／同　秋田屋太右エ門／同　河内屋茂兵衛／同　河内屋和助／同　秋田屋市兵衛／西京　出雲寺文次郎／同　村上勘兵衛／同　勝屋伊八／同　出雲寺萬治衛／同　小林新兵衛／同　丸屋善七／同　和泉屋市兵衛／同　須原村治右衛門／同　杉本甚助」「東京　須原屋茂兵衛／同　山城屋佐兵郎／同　椀屋喜兵衛／同　近江屋半七／同　長門屋龜七／同　三家村佐平」「名山閣／東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售」（後ろ表紙見返し）

刊年の記載はない。おそらく、明治十～二十年代（一八七七～一八九六）に発行されたものと推測される。

四　南総里見八犬伝

曲亭馬琴作　柳川重信・溪齋英泉画
後印本　半紙本　三十七冊　半紙本
博文館（大橋新太郎）
明治三十（一八九七）年刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

既に多数の活字洋装翻刻本が出版されていた明治三十年に至っても、板木から摺り出した和装本が、謂わば「豪華愛蔵版」として木箱（高さ四十七cm×幅十八cm×奥行二十六cm）に入れられて売られていた。

全九輯五十三巻。半紙本三十七冊（合冊）、表紙は小豆色地絹目に唐草模様、外題「南總里見八犬傳　一（～三十七）」、見返「曲亭馬琴著作／南總里見八犬傳／東京　博文館藏版」（赤色地墨摺）、刊記「明治三十年七月二十八日翻刻印刷／明治三十年七月三十一日發行／發行兼／印刷者　日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎／發兌書林東京市日本橋區本町三丁目　博文館」。

ただし、「博文館出版圖書目録」（創業二十週年記念発兌「太陽増刊」、明治四十（一九〇七）年六月十五日、博文館）に、「曲亭馬琴翁著（本箱入）全五十冊（大判三〇五一枚）／［和装並製］南總里見

八犬傳　正價九円五拾錢／小包料六拾四錢」と見えているのは、冊数は異なるが同様の板本であろうか。実物は未見である。

五　南総里見八犬伝

曲亭馬琴作　柳川重信・溪齋英泉画
三十七冊　半紙本
博文館（大橋新太郎）
明治三十（一八九七）年刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

同前の板本。原板木を用いて発行された最も新しい後印本『八犬伝』ということになる。

六　南総里見八犬伝

曲亭馬琴作　柳川重信・溪齋英泉画
和装活版　半紙本、四十二冊
東京稗史出版
明治十五（一八八二）年刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

『八犬伝』の活字翻刻本は明治十（一八七七）年代の半ばから和装本で出版され始め、東京稗史出版社版（明治十五（一八八二）～明治十八（一八八五）年）は黄土色表紙の半紙本仕立て、全四十二冊の立派な仕立である。

各輯巻頭の口絵だけを薄墨板まで覆刻しているが、原板木を使用したものではない。第九輯三十二巻の巻末広告には「畫圖原本飜刻」とあるが、原本を摸して改刻された板を使ったもので、新たに描き直されたものではないという意味のようだ。挿絵の大部分は省かれている。第三輯までが明治十五（一八八二）年十一月、第七輯までが明治十六（一八八三）年三月、第九輯巻十八までが明治十六（一八八三）年十一月、同巻三十二までが明治十七（一八八四）年四月、同巻五十三までが明治十八（一八八五）年三月に出されている。

七　雪梅芳譚　犬の草紙

笠亭仙果（二代目柳亭種彦）鈔録
三代歌川豊国（国貞）ほか画
中本　五十五編迄百十冊
初編が松坂屋太平治板三編
以下は紅英堂蔦屋吉蔵板
嘉永元（一八四八）年～
明治十五（一八八二）年刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

読本『南総里見八犬伝』に基づき、全丁に挿絵を施し、本文を平仮名主体に書き直し草双紙化したもの。美しい錦絵風の摺付表紙が目を惹く。貸本屋を通じて読まれた高価な読本に対して、草双紙は個人が購入可能な値段で、毎年正月に出板されていた。作者は笠亭仙果（二代目柳亭種彦）であるが、鈔録なので「作」ではなく「鈔録」「訳」と記している。画工は役者似顔絵の名手である歌川派の三代豊国（国貞）とその門下が担当していて評判になった。ただし、登場人物名や地名等は原本の相当する人物等が分かる程度ではあるが、表記を含めて変更されている。

また、同時期に八犬伝を草双紙化した『仮名読八犬伝』が出され、競合しつつも人気を二分した。

八　仮名読八犬伝

為永春水（一～十六編）・
鳳簫菴琴童（十七～二十七編）・
仮名垣魯文（二十八～三十一編）作
一勇斎国芳（一～二十七編）・
一恵斎芳幾（二十八～三十一編）画
中本　三十一編六十二冊
二十七編までは文溪堂（丁子屋平兵衛）
二十八編～三十一編は菊寿堂板
嘉永元（一八四八）年～
明治元（一八六八）年刊
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

二十九～三十一編欠。

参考資料

八犬伝から派生した鈔録ものを挙げる。A 鈍亭魯文『英名八犬士』（切附本、八編八冊、安政二（一八五五）、伊勢屋忠兵衛板）。原作の本文を切り貼りしたものである。本作には、B「曲亭馬琴著」と改竄された改題後印本『里見八犬伝』（袋入本、八巻八冊、明治初期、木村文三郎板）がある。また、C 鈍亭魯文『當世八犬傳』（合巻、一冊、芳宗画、安政三年、糸屋庄兵衛板）は鈔録と云うよりは名場面集という風情で、世界一短い八犬伝である。D 二代目為永春水『今様八犬伝』（正本写合巻、六編、国芳画、嘉永五～六（一八五二～三）年、錦耕堂山口屋藤兵衛・紅英堂蔦屋吉蔵板）は、嘉永五年の八犬伝歌舞伎上演に際して出されたもので、役者似顔を用いて描かれている。E 長谷川小信画『里見八犬傳』（合羽摺合巻、二冊、明治初期、大阪 綿屋 前田喜兵衛板）はステンシルに拠る彩色本。F 町田瀧司編『明治新刻 繪本八犬傳』（銅版絵本、一冊、明治十七（一八八四）年、山本常次郎）と、『繪本里見八犬傳』（銅版絵本、一冊、明治二十二年、大阪 荻田庄七）。G『里見八犬傳』（明治期合巻、二冊、明治初期）は化学染料を用いた赤色を主体とした表紙をもち、本文は仮名漢字交じりで、絵は粗雑なものである。このほか八犬士の次世代を描いた二代

目為永春水『八犬傳後日物語』（合巻、七編、嘉永六～安政四年）や慕々山人（魯文）『佐勢身八開傳』（春本、安政三～四年）など多くの派生作が作られた。

第二部　整版から活版へ

近世期における日本の商業出版の隆盛は整版によってもたらされた。一枚の木の板に文字と絵を彫り込む技術の成熟は、多様な文字・図版・そしてそれを基盤としたメディアと出版文化を生み出した。

しかし、幕末に西洋の情報が政治的な危機意識にうながされて流れ込んできた時、西洋式の金属活字を用いた活版印刷というテクノロジーも共に流れ込んでくることになる。西洋式の活版印刷はそれまでの整版とは異なる利点を持っていた。活字によって素早く版を作成できる活版印刷は、次々に更新される情報に適しており、また活版印刷自体が情報の更新をうながしていた。新聞・雑誌といった逐次刊行物は活版なしには成り立ち得ない。また整版の文字よりもはるかに小さな文字による組版と洋紙両面刷りは情報密度を飛躍的に高めた。活版印刷とは、情報を速くコンパクトに人々に送り届ける最新の情報テクノロジーだった。

この技術を取り入れるには様々な技術的問題をクリアする必要があった。特に大きかったのは漢字の問題である。複雑な字画と大量の字数が必要な漢字活字は、アルファベットとは異なる活字の製作法を必要とした。その技術はすでに中国におけるキリスト教の伝道の場で実現していた。上海の長老教会派の印刷所である美華書館は、電胎法という技術によって美しい明朝体活字による聖書の印刷に成功していた。美華書館の技師ギャンブルから伝習を受けた本木昌造は、美華書館の漢字活字を複製することによって、日本の基準活字となる最初の明朝体活字を作った。

明朝体活字以外にも幕末から明治初期にかけて複数の金属活字製作の試みがなされた。その多くは洋学系の教育機関などごく狭い範囲で使用されたものだった。本木昌造は明治五年（一八七二年）に明朝体活字の見本帳を作り、これを商品化して流布する道筋を開いたのである。

しかし、整版とは異なる活版の特徴は、それまでの印刷・出版文化との間にさまざまな軋轢を生み出した。絵本類は、文字と図版を基本的に切り離して印刷せざるを得ない活版印刷と、様式上の葛藤を生じた。また、活字の組み直しによって無数のヴァリアントを発生させる活版印刷は、本文校訂や版の保存についても新たな対応を必要とした。銅版印刷は、活字並みの細字と絵を同一の版に彫り込める技術によって、一時的に活版印刷を脅かす技術になりかけた。だが、最終的には技術者の熟練を比較的問わず、労働力の集約および機械化を実現した活版印刷が印刷の主流となり、日本の出版文化は近代的な段階に入っていくことになる。

（第二部解説　木戸雄一）

九　平家物語圖會

前編　大本（二四・九cm×一七・五cm）
六巻六冊（合一冊）
高井蘭山校正・蹄齋北馬画、羣玉堂蔵版
文政十二（一八二九）年
伏見屋半三郎・河内屋茂兵衛・大阪屋茂吉郎
個人蔵

江戸読本の中でも図会ものと呼ばれている一種で、挿絵を加えて原話を抄出したもの。自叙は「文政九（一八二六）年丙戌夏至」とあるが、刊記は三年後になっている。

展示資料は桃色無地表紙左肩に題簽「平家物語圖會　前編　全」。見返なし、巻頭に後編（巻之七）の「平家物語圖繪序［水落石出］」が綴じ込まれている。本文中や上部に墨に拠る毛筆と赤インクに拠る活字の種類や大きさなどの組版指定の書き込みと、朱墨に拠る本文訂正が見られる。洋装活版本（ボール表紙本）『絵本平家物語』の原稿として使用されたものと思われる。

明治初期の翻刻本は、板本に用いられている崩し字が読める職人が多かったはずであるから、わざわざ手書きの翻刻原稿が作成されることなく、板本がそのまま原稿（組版指定紙）として用いられたことを証する資料である。

（髙木稿）

一〇　絵本平家物語　全（巻頭題「平家物語圖會」）

洋装活字本　（所謂「ボール表紙」）
一八・二cm×一二・四cm）　四九三頁
一冊　高井蘭山編　一龍斎國松画
明治十九年三月四日御届／同七月出版
大阪　駸々堂　個人蔵

『平家物語圖會』の翻刻活字本としては四種のボール表紙本が確認されるが、この一本は確実に、組版指定を書き入れた板本を使用して造られたものである。

本文は四号明朝活字、四十字詰×十三行という組み指定、仮名序は変体仮名で書かれた板面の雰囲気を出すため四号菱湖が指定され、飾枠の図柄指定、項目毎の「○」を「●」に変更する点、挿絵目録の削除や訂正、替頁指定まで、ことごとく指定通りに組版作成されていることが分かる。

なお、前後編の序や、繍像風に人物本位にされた口絵は巻頭に集約され、挿絵も原本の摸写ではなく、適宜省略された上で選ばれた画題として見慣れた場面が、一龍斎國松に拠り描き直されている。

残念ながら、展示したものは前編のみで、後編は所在不明である。

（髙木稿）

一一　新約全書

美華書館刊　明治二（一八六九）年
一冊　一八・〇cm×十一・八cm
個人蔵

上海の長老教会派の印刷所である美華書館が刊行した活版の漢訳聖書。美華書館の印刷技師ウィリアム・ギャンブルによって電胎法で鋳造されたスモールパイカ（当時の活字サイズの規格）の明朝体活字が使われている。ギャンブルは後に来日して電胎法による漢字活字の製法を伝習する。その教えを受けた本木昌造によって美華書館のスモールパイカ活字が父型として使われ、最初の五号明朝体活字が生まれた。

一二　学問のすすめ

福沢諭吉
明治五（一八七二）年～明治九（一八七六）年
一冊　一八・一cm×一二・九cm
大妻女子大学図書館蔵

『学問ノスヽメ』は第四編（一八七二年一月）から第十一編（一八七四年七月）までが活版本（ただし六・七編は整版もあり。第十編は整版のみ）。本木系活字の一種と見られるが詳細は不明。東京銀座で活字製造業を始めた志貴和介の製造した活字が混じっているのではないかとも言われる。

一三　築城典刑

大鳥圭介　万延元（一八六〇）年
三冊　一八・〇cm×一二・六cm
大妻女子大学図書館蔵

縄武館刊。大鳥圭介が幕府の軍事教科書を出版するために製作した日本語活字が使われている。銅に文字を直接彫刻して活字母型とし、銃の弾丸製造器を用い亜鉛と錫を溶かして活字を鋳造したという。

一四　検尿要訣

足立寛　明治四（一八七一）年頃
一冊　一八・七cm×一二・七cm
個人蔵

大学東校刊。大学東校（現東京大学医学部）の写字生であった島霞谷によって製作された日本語活字が使われている。この活字はツゲの角材に文字を彫った父型を柳の木口に打ち込んで母型とし、鉛七〇％・アンチモニー三〇％の合金で鋳造した。大学東校の教科書印刷に明治三年一〇月から明治四年夏頃まで使われた。活字一式は東京大学博物館が所蔵。

一五　夜嵐於絹花廼仇夢

岡本起泉　明治十一（一八七八）年
十五冊　一七・九cm×一一・八cm
大妻女子大学 草稿・テキスト研究所蔵

明治期草双紙。金松堂刊。整版。いわゆる「毒婦物」とされるが、途中までは人情本的な恋物語。四編中より毒婦物として展開する。初編自序によれば『さきがけ新聞』に発端が書かれた後中絶して単行本化されたもの（原紙は現存未確認）。挿絵と本文の不整合が巻を追って大きくなり、絵本としての整合性を失っていく明治期草双紙の特徴が見られる。

一六　巷説児手柏

高畠藍泉　明治十二（一八七九）年
二冊　一七・九cm×一一・九cm　個人蔵

活版草双紙。文永堂刊。『芳譚雑誌』に一八七九年二月一一日から五月二六日まで連載された「つづきもの」を単行本化したもの。木版合巻が主流だった時期に活版と木版合巻の体裁の折衷を模索して、擦付表紙・序文・口絵を木版合巻の体裁に、本文のみ連載の活字を組み直し連載時の挿絵も流

用して「活版草双紙」という新たな様式を生み出した。展示品の二本は同様の奥付を持ちながら本文の活字フォントが異なっており、いずれかが後版。版を保存する紙型の技術が広まっておらず、再版の際には新たに版を組み直していた。

一七　訓蒙勧懲雑話（活版本）

和田順吉訳　明治八（一八七五）年
一冊　一九・二cm×一三・五cm　個人蔵

ドラパルム原著。児童向けの修身の教本として訳されたもの。ボール表紙背クロス抜き綴じ。洋紙両面活版。

一八　訓蒙勧懲雑話　下（覆刻本）

和田順吉訳　明治九（一八七六）年
一冊　一八・二cm×一二・二cm　個人蔵

小林新兵衛刊。右の活版本を木版で覆刻したもの。和本緒紙袋綴じ整版。活版印刷の初期に繰り返し需要があるテキストは木版で被せ彫りされる場合があった。教育機関等で小規模に行われていたものが多い。世界地理の暗誦に使われた福沢諭吉の『素本世界国尽』、医学の教科書として使用された『日講紀聞』などに事例がある。

一九　紙型

大妻女子大学図書館蔵

活字を組み上げた版面に耐熱性のある特殊な紙を押し付けて圧力をかけ、版面を写し取ったもの。この紙型を鋳型にはめて鉛合金で鋳造されたものが印刷に使われる鉛版である。紙型の登場によって版の保存が可能となり、印刷所や出版社の経済的な基盤となった。また版を円筒形に丸めることができるため、輪転式印刷機によって印刷速度が大幅に向上し、印刷物の大量生産につながった。

二〇　世界旅行万国名所図絵（増補版）

青木恒三郎編
明治二十二（一八八九）年
七冊　一五・〇cm×九・八cm
大妻女子大学図書館蔵

銅版。ボール表紙背クロス。世界各地の風景を図版にした世界地誌。活版印刷が同一版面に文字と図像を印刷することが難しかったのに対し、銅版は整版同様に同一版面に文字と図像を容易に彫り込めるため、絵入り本では比較的長く使われた。

第三部　洋装本の移入

活版印刷が新たな印刷技術なら、その印刷物をパッケージする新技術は洋装本だった。和本とあまりにも異なる洋装本の製本は、幕末にはすでに長崎や江戸を中心に不完全ながら試みられていた。

しかし、洋装本の製本技術が本格的に移入されるのは明治期になってからである。明治五（一八七二）年、英学の私塾だった共立学舎は、当時輸入されていたアメリカ版の教本類の製本技術を忠実になぞりながら『傍訓英語韵礎』を刊行した。一方、新政府は政府や民間の印刷製本を引き受ける印書局を開設し、カナダから製本師パターソンを招聘して本格的な洋式製本を伝習させる。彼は堅牢で実用的な製本を伝えた。『仏蘭西法律書』はその代表的なものである。

洋装本は『傍訓英語韵礎』のような簡易な製本と、『仏蘭西法律書』のようないわゆる上製本の二つの様式が移入された。やがて、上製本の洋装本に用途とは異なる次元の付加価値が付け加わる。背の金文字や小口のマーブル、天金、革やクロスによる装幀などは広告で強調され、和本を洋装本に仕立て直す書肆も現れるようになった。一方でいわゆる「ボール表紙本」という、小説本を中心とした厚表紙背クロス平綴じの洋装本が安価に粗製濫造され、洋装本という書物の形が一気に広まることになる。（第三部解説　木戸雄一）

二一　英吉利単語篇

開成所　慶応二（一八六六）年
一冊　一九・〇cm×一一・九cm
大妻女子大学図書館蔵

江戸幕府の洋学機関であった開成所が刊行した英単語のテキスト。蘭書などに使われていた仮綴の技法を模倣した製本。表紙は和紙と漉き返しを貼り合わせて厚みを出している。本書は幕末維新期の洋学需要にともない版を重ね、民間でも翻刻された。

二二　傍訓英語韵礎

尺振八・須藤時一郎
明治五（一八七二）年
一冊　一六・三cm×一一・七cm
個人蔵

三大英学塾の一つと言われた尺振八の共立学舎から刊行された英単語のテキスト。厚表紙背クロス。本文は整版緒紙袋綴じ。和本で刊行されていた当時の英学テキストに対して、テープ綴じを用いるアメリカのスペリングブックの製本を模倣しており、洋装本という西洋の情報パッケージ技術を移入しようとした啓蒙的な意識がうかがえる。また本書は表紙に輸入ボールではなく厚手の漉き返しを使用しているが、その形状から後に流行した「ボール表紙本」の最初のものとされている。

二三　The elementary spelling book.

Noah Webster　一八八〇年頃
一冊　一七・四cm×一〇・七cm　個人蔵

一九世紀にアメリカを初め世界でベストセラーとなったウェブスターの綴り字テキスト。表紙の色からBlue-Backと呼ばれて親しまれた。日本でも一八八〇年代以降複数の書肆から翻刻本が刊行された。テープを使った平綴じと、背芯の入っていない背の形状（いわゆる「南京綴じ」の背の形状）はアメリカの薄物製本が多用した。

二四　仏蘭西法律書

箕作麟祥訳　明治八（一八七五）年
二冊　一八・二cm×一三・〇cm　個人蔵

印書局で洋式製本の伝習を行なったパターソンによる製本。総革丸背上製本抜き綴じ。大量生産に適応したくるみ製本ではなく、西洋の手製本の技法である綴じつけを用いた堅牢な造りである。西洋で工芸製本から工業製本へと移行する過渡期において、パターソンは手製本と工業的な製本の両方の技術を習得していた。洋式製本技術は官庁の製本を請け負っていた書肆にも伝習され、同様の製本で一八七六年と一八七八年に本書が民間書肆から出版されている。

二五　欧羅巴文明史

永峰秀樹訳　一冊
二三・〇cm×一五・七cm　個人蔵

ギゾー原著。元々は和本十冊で三円五十銭であったが、本書は本文を同じ整版のまま薄く丈夫な薄葉紙に摺って紙のかさを減らし、背革クロス装で洋装本に仕立てた。価格は四円になった。

第四部　音読と黙読

十九世紀の日本は豊かな音読の文化を持っていた。漢籍の素読や草双紙の絵解きはそれぞれ朗読と読み聞かせという異なる音読の文化に拠っている。講談、浄瑠璃、謡曲、詩吟など多くのジャンルが音読によって享受され、明治期に入っても新聞や雑誌は音読による集団的な享受がしばしば行われた。政治小説などは音読に適した漢文脈の文体に依拠することで集団的な読書のアイテムとして機能し、政党のプロパガンダに貢献した。また、読み手も様々な文体を音読に落とし込む能力を身につけていた。高瀬文淵は最も散文的と言われる『浮雲』第三篇を朗誦したという。

一方で近代の印刷技術によって印刷物が多くの人に行き渡るようになると、黙読の機会が増えた。書物と読者の一対一の対話的関係を前提として育ったのが近代文学だった。小型化した書物は屋内や屋外の人目につかない場所での読書を可能にし、また書斎空間の登場は書物との対話を楽しむために洗練された書斎趣味を生み出した。

もっとも、書物の小型化や読書空間の密室化は必ずしも音読を排除しない。読み聞かせる音読だけではなく、自らにささやきかけるような音読がそこではなされる。そしてこのような密やかな個人的読書から、自らも筆を執って書く自己表現も触発された。明治三十年代には投稿雑誌が爆発的に増えるが、それらは作文教育の場から自己表現の場へと変容し、文体も文語から口語へと変化した。そして日露戦後にはより直接的な自己表現を意識するようになった。（第四部解説　木戸雄一）

二六　佳人之奇遇

東海散士
明治十八（一八八五）年～
明治三十（一八九七）年
一六冊　二五・五cm×一五・三cm
大妻女子大学図書館蔵

政治小説の代表作。会津の遺臣東海散士が、スペインのドン・カルロス党員幽蘭（ゆうらん）、アイルランド独立闘士紅蓮（こうれん）という二人の佳人と、明の遺臣鼎范卿（ていはんけい）を交えて憂国の情と独立の悲願を語り合うところから始まり、列強に抑圧された弱小国の悲劇が次々に語られる。本書の文章は朗誦に適した名文とされ、書生に好まれた。

二七　見聞雑録

南洋漁夫
明治二十三（一八九〇）年頃
一冊　二三・三cm×一五・五cm　個人蔵

写本。南洋漁夫、鏡水漁夫、羊我居士、迷花生の四名がそれぞれ選んだ詩歌文章を写した文集。筆者の詳細は不明。抜粋されている文の年代から明治二十年代のものと思われる。書生などの朗誦に好まれた文が選ばれており、『佳人之奇遇』も収録されている。

二八　小扇（おうぎ）・恋衣（こいごろも）

小扇

与謝野晶子　明治三十七（一九〇四）年
一冊　一八・八cm×八・六cm
大妻女子大学図書館蔵

三六判仮綴じ表紙。『みだれ髪』（一九〇一年）の装幀を担当した藤島武二の意匠による歌集。一九〇〇年代には同様のスタイルの歌集・詩集が流行した。携帯に便利であり、密やかな読書のために最適化された書物だった。

恋衣

山川登美子・増田雅子・与謝野晶子
明治三十八（一九〇五）年
一冊　一八・八cm×八・四cm
大妻女子大学図書館蔵

三六判仮綴じ表紙。中澤弘光装幀。『みだれ髪』『小扇』と同様の袖珍本の歌集。晶子の「君死にたまふことなかれ」が収録されている。

二九　吾輩は猫である

夏目漱石
明治三十八（一九〇五）年
〜明治四十（一九〇七）年
三冊　二二・七cm×一五・二cm
大妻女子大学図書館蔵

菊判角背天金アンカット。表紙は鳥の子紙の薄表紙に金と朱による猫と落款を象った型押し。当時珍しい厚手のカバーはコットン紙。装幀した橋口五葉は書物全体を美術的なオブジェと見る装幀観を持っていた。表紙の意匠について漱石は直接五葉に希望を伝えており、西洋の書斎文化と書物趣味の移入を意識していた。

三〇　ハガキ文学　二巻三号

日本葉書会
明治三十八（一九〇五）年
一冊　二二・六cm×一五・四cm
大妻女子大学図書館蔵

一九〇四年一〇月〜一九一〇年八月。日本葉書会、のち精美堂発行。坪内逍遙、与謝野晶子らを名誉賛助員とする日本葉書会により創刊された。当時流行の絵はがきを美術的な観点から趣味あるものにするとともに、文章的な観点からも「緊密素朴」な短文の充実に努めた。折から地方を中心に文章の投稿が盛んになっており、文章や文学を自らも書く人々が急速に増えてきていた。

三一　文章世界　一巻八号

博文館　明治三十九（一九〇六）年
一冊　二二・六cm×一五・二cm
大妻女子大学図書館蔵

一九〇六年三月〜一九二〇年一二月。博文館発行。当初は実用文の作文投書雑誌を目指していたが、田山花袋の編集によって文芸雑誌化した。排技巧を目指す自然主義的な文章観が投稿文の評価にも反映された。室生犀星、久保太万太郎、吉屋信子、内田百閒（ひゃっけん）、片岡鉄平、細田民樹、米川正夫、木村毅など多くの作家や文人、学者を輩出し、大正・昭和期の文学のゆりかごの一つとなった。

さまざまな印刷法

板木

凸版印刷の一種である木版印刷の版。一丁分の文字や絵を、板木の両面に一丁ごとに板木に彫刻する。板木は財産にもなり、近世商業出版を技術的・経済的に支えた。

石版

平版印刷の一種。化学反応を起こしやすい石灰岩の表面に化学処理をほどこし、インクになじむ部分とインクをはじく部分を作る。図版印刷の技術として使われることが多かった。磨いた石版による単純な色調の「磨き石版」と、点描で濃淡を

表現する「砂目石版」がある。

銅版

凹版印刷の一種。銅板に直接傷を付けるか、薬品による腐食によって作られた凹部にインクを詰めて紙に転写する。銅版は地図・紙幣・証紙など

近代国家に必要な図版の印刷に必要な技術だった。なお、凸版の銅版もある。

参考文献

・髙木元「新収資料紹介①江戸読本『南総里見八犬伝』」(『研究所年報』十二号、草稿・テキスト研、二〇一九年七月)

・髙木元「新収資料紹介　名山閣板『南総里見八犬伝』」(『研究所年報』十号、草稿・テキスト研、二〇一七年七月)

・髙木元「明治期翻刻本の出版」(「読本研究新集」十一輯、読本研究の会、二〇二〇年二月)

・『活字文明開化―本木昌造が築いた近代』(凸版印刷印刷博物館、二〇〇三年)

・小宮山博史『明朝体活字　その起源と形成』(グラフィック社、二〇二〇年)

・永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール出版部、一九九七年)

・佐々木亨『明治戯作の研究―草双紙を中心として―』(早稲田大学出版部、二〇〇九年)

・木戸雄一「書物の転形期」https://note.com/kidoyou/m/m69c97d17cfc8(二〇二〇年四月～)